

回顧録

本文はアラビア語専門の外務省員として39年を過ごした著者の波乱にみちた経験を回顧したものであり、2012年8月28日から2013年10月1日まで29回にわたって「ASAHI 中東マガジン」に掲載されたものを、そのまま転載したものである。最初の記載からすでに9年間が経過しているが、日本と世界を取り巻く外交関係が混迷を極めてい

アラビスト外交官の39年 第1回

塩尻 宏(中東調査会参与、元駐リビア日本国大使)

(1) 外務省入省からカイロでの語学研修 (2012年08月28日)

〈はじめに〉

半世紀近く前の私の学生時代には、アラビア語の参考書・辞書や中東・アラブ世界の資料を入手するのに四苦八苦したことを思い出します。情報化社会を迎えてソーシャルメディアが飛躍的に発達した現在では、どこかの国の片田舎の出来事であっても瞬時に世界中に伝わるようになりました。表面的な事象についての情報が溢れるようになりましたが、日本社会においては、アラブ世界は未だ馴染み薄い存在のままのような気がします。

読者の皆様も、それぞれのお仕事や暮らしの中でさまざまな経験をされたと思います。私自身も文化や歴史的背景が異なる世界との関わり合いを通じて様々な人々に出会い、興味深い出来事を体験しました。私の中東での体験やアラブ世界で得た知識については、2010年4月から『ダイヤモンド・ガス・レポート』（ダイヤモンド・ガス・オペレーション株式会社、会員限定のネット配信週刊レポート）の「コラム」に『アラブ世界の四方山話』として連載しています。

「Asahi 中東マガジン」のこのシリーズでは、外交官としての体験に絞って書きます。『ダイヤモンド・ガス・レポート』の「コラム」の内容と重複する部分もありますが、この拙文が皆様の中東への関心や理解の増進に些かなりともお役に立つことができれば嬉しく思います。何分にも相当に昔のことですので、不確かな記憶や思い込みで正確さを欠いているところも多々あると思いますが、ご海容頂きますようお願いいたします。

〈アラビア語事始め〉

私の郷里は大阪府ですが、アラブ世界と付き合い始めたのは、1960年代の半ばに大阪外国語大学アラビア語学科（現在は大阪大学外国語学部外国語学科アラビア語専攻）に入学してからです。高校卒業後2年半ほど地方公務員として働きましたが、高等教育を受けたいとの気持ちが強まり、大学受験に挑戦しました。当時は、「アラビア石油」と言う日本の会社が、サウジアラビアとクウェートの中立地帯でカフジ油田（1960年）、フート油田（1963年）などを次々と発見して大きな話題を呼んでいました。そのため、たまたま大阪外国語大学のアラビア語学科を志望校の一つに選び、たまたま合格して、その後の人生の行方が決まったわけです。

大学に入ってあのミミズがのたうつ様なアラビア文字を初めて見た時には、「こんな文字を使う言葉を習うのか！」とある種の戦慄を覚えたことを記憶しています。以来40年以上にわたりアラブ世界とアラブ人との関わりが続いていますが、これまでのことを振り返ると、懐かしさと共にほろ苦さを感じることもあります。

学習が進むにつれて次第にミミズ文字にも慣れ、それなりに文法も習得してアラビア語で何とか基本的なコミュニケーションが出来るようになりましたが、日本語や英語などにはない一部の発音や今まで見聞きした外国語とは全く異なった文章構造には、戸惑いの連続でした。そのような中、当時、非常勤講師として教鞭を取られていた元外務省アラビア語専門家（アラビスト）であった先生の授業を受けたことがあります。その語学力の高さと説得力のある教え方に衝撃的な感銘を受けたのを今でも覚えています。

大学を卒業してから約40年を外務省員として過ごし、そのうち約22年をアラブ世界に在勤しました。これまでの人生の6割近くをアラブ世界との関わりの中で過ごしたことになります。その間に遭遇した出来事や様々な体験は外務省を離れた今の私の無形財産となっています。外務省員の仕事の原点は、異文化理解の尖兵たることであると考えてアラブの人々と付き合ってきましたが、これがなかなか容易ではありません。未だに彼らの予想外の行動様式や考え方に不意打ちを喰らって新たな発見をすることがあります。

《思いがけず外務省へ》

アラビア語を専攻して大学を卒業したのは、もう45年以上も昔のことです。外務省に興味が全くなかったわけではありませんが、当時は、アラブ世界で仕事ができるのであれば何処でも同じだろうと思っていました。大学卒業の前年には既に民間企業への就職が内定し、卒業と同時に或るアラブ国にある現地事務所へ赴任する予定となっていました。ところが、別途たまたま試しに受けていた外務省の語学研修員試験に合格したことで、事態は予想もしていなかった展開となりました。

当時から外務省の入省試験の外国語はアラビア語でも可能とされていましたが、英語で受験する人が圧倒的に多数でした。英語による外国語試験で入省した先輩方は、自分の期待や願望とは無関係にアラビア語の研修を命じられるのが通例だったようです。入省後の懇親会の折に「アラビア語は第5志望だった」と冗談交じりに告白した仲間もいたことを覚え

ています。私は、外国語試験をアラビア語で受験し合格した初めてのケースであったために珍しかったのか、外務省OBの大原先生やその後輩で当時現役の外務省アラビストなどからの熱心な勧めや誘いがありました。それに心を動かされたこともあって、結局人生の進路を変えたわけです。そして、昭和42（1967）年に大学を卒業して外務省に入りました。

外務省からの働き掛けもあって、内定を頂いていた企業からは「事情は了解しました。ご検討を祈ります。」との手紙を頂きましたが、ご迷惑をかけたことについては、今でも申し訳ない思いが心に残っています。今となっては、私があの時に進む道を変えたことが、結果として良かったのかどうかは未だに分かりません。

それが約40年にわたる外務省員としての生活の始まりでした。入省してから4ヶ月後の8月上旬には在外アラビア語研修員としてエジプトのカイロに居ました。その1年前までは、自分がカイロに住むことになるとは想像もしていませんでした。あの頃の数年間は思いがけないことの連続で、私の人生の激動期だったと思います。

その後、カイロでの約2年の語学研修期間を終えると、1969（昭和44）年6月に在エジプト日本国大使館の領事班に配属されて実際の勤務に就きました。その後は、スーダン→東京→エジプト→南イエメン（当時）→ヨルダン→東京→エジプト→アメリカ（ボストン）→東京→UAE（ドバイ）→リビアに勤務しました。

《外務省の語学研修》

私は、今から45年前の1967年4月に語学研修員として外務省に入省しました。同期生は私を含めて14名で、入省後にそれぞれの研修語が言い渡されました。外国語の試験をアラビア語で受験した私は、アラビア語の研修を命じられるのが当然と予想していましたが、その通りになりましたが、他の同期生にはフランス語（2名）、スペイン語（2名）、ポルトガル語（2名）、ギリシャ語、スワヒリ語（東アフリカ）、ブルガリア語、ヒンディー語、シンハリ語（スリランカ）、カンボジア語、ラオス語の研修が命ぜられました。彼らは、入省後に言い渡されて初めて自分の研修語が分かり、喜ぶ者、安心する者、戸惑う者など様々でした。

現在は入省後1～2年は実務研修と称して東京の外務省各課で勤務してから在外研修に出るようですが、当時は4月に入省して3ヶ月余りの事前研修の後、それぞれの研修地に赴任していました。事前研修では、当時文京区茗荷谷にあった外務省研修所（現在は神奈川県相模原市に移転）で専門語学の予備講習や外交儀礼、海外赴任に当たっての心得などの講義を受けました。

外務省の在外研修期間は、それぞれの言語の学習環境の難易度に応じて2年又は3年となっています。現地では日本大使館に所属する外交官の身分ですが、研修期間中は大使館の業務には従事することなく語学研修に専念します。今は少し事情が変わっているかも知れませんが、私の研修時代には、研修指導官に指名された大使館の上司の監督を受けましたが、

大使館や日本人との接触はできるだけ控えて、その国の実情に合わせて現地社会に溶け込んだ形で学習するよう指導されました。

民間企業の内定を貰っていた私が外務省への入省を勧められ際には、「外務省ではアラビア語の在外研修期間が3年」と言われました。しかし、入省して暫くすると人事課から「あなたのカイロでの研修期間は2年間」と告げられました。

「大学で専攻した外国語で試験を受けて入省した者が同じ言語を研修する場合には、3年研修を2年に短縮する」との但し書きがあったようです。大学で専攻したアラビア語で受験して入省してアラビア語の研修員となったのは、私が初めてのケースでしたので、当時は人事当局も上記の但し書きがあることに気付かなかったようでした。そうであれば、最後まで気付かないで欲しかったと思いました。

《初めてのカイロ》

今から43年前の1967年8月に外務省のアラビア語在外研修員としてエジプトに赴任しました。南回り便のヨーロッパ行き日本航空機で羽田空港を出発し、タイのバンコク、パキスタンのカラチを経由して翌日の未明にカイロ国際空港に降り立ちました。飛行機に乗るのはもちろん海外旅行も全く初めてでした。道中の全てがもの珍しさと心細さとがない交ぜになった感じであったのを覚えています。空港では既に前年から滞在していた先輩研修員の出迎えを受け、カイロ市内の中心部にある安宿に案内されました。まだ夜が明けていないために、空港から市内に向かう際の街の様子はよく分らなかったのですが、全体が埃っぽく感じ、砂漠の国に来たのを実感しました。

宿に着いて数時間後に夜が明けました。部屋の窓を開けると、雲ひとつない快晴の空の下に流れているナイル川の風景に感動しました。窓の下の道路ではちょうど出勤のラッシュアワーが始まっていました。ひっきりなしにクラクションを鳴らす自動車が溢れ、それらの間を通行人が縦横無尽に横切り、ロバが引く荷車が悠然と進んでいました。最初の数週間は毎朝、快晴の空とナイル川と騒然とした道路の様子を宿の窓から眺めて、これがカイロなのだとの感慨を覚えました。また、最初の数日間は、その日の天気を気にして毎日早朝の空を眺めていましたが、夏のカイロは毎日快晴が続きます。そのうちに天気を気にすることはなくなりました。2年ほど前に訪れた最近のカイロでは、中心部に高層建築や高速道路などが増えていましたが、埃っぽさと騒然とした道路の様子は相変わらずと感じました。

《エジプト人家庭での下宿生活》

最初の1年近くをホームステイの形でエジプト人の家庭に下宿しました（正確には「上司の命により下宿させられた」）。下宿先の家族は、ある公社の中堅管理職であった主人が世帯主で、夫人は小学校の教員（後に校長）、それに育ち盛りの3男2女（中学～高校）と夫人の姉が暮らしていました。当時（1960年代後半）のエジプトでは数少ない中産階級の家

庭であったと思われます。そこに私が加わって合計 9 人が一つの家に住むことになりました。

日本でも下宿生活をした経験のない私ですが、カイロでエジプト人家庭の中で彼らと 3 食を共にして日常生活を始めました。最初の数ヶ月は、こちらは明確に伝えたつもり（しかも彼らの言葉で）なのに彼らの対応がイマイチでしっくりせず、こちらの意図や思惑とのすれ違いを感じるものがしばしば起きました。今でも印象深く覚えている幾つかの出来事を書いてみます。

まずは食事について、彼らは肉や油が基本的栄養源と信じているようで、毎日の食事は揚げ物や炒め物が中心でした。付け合せの米料理も油で炒めたものでした。私にとっては主食くらい日本式のご飯を食べたいと思って、女主人に幾度となく「私だけには、油で炒めないで水だけで炊いたものを作ってほしい」と頼みました。しかし、彼女は「分かった、分かった」と言ってくれましたが、日本式のご飯の炊き方を知らないのか依然として炒めご飯が続きました。食欲も落ちてきた私は、それなら自分で作ろうと思って台所で一人分のご飯を炊いていると、女主人とその同居中の姉が来て、「油を入れずに作った栄養がない米料理を食べ続けると病気になる。日本大使館の依頼で預かっているヒロシ（私）に、栄養のないものを食べさせるわけにはいかない」と諭されました。

カイロでは、日本より気温が高く乾燥して埃っぽい気候です。今では生活環境が変わっているかも知れませんが、当時、彼らは週一回（大抵は木曜日）しか風呂に入りませんでした。下宿先の家庭では、私一人がシャワーを使うかバスタブにたっぷりと湯をためるかして毎日風呂に入っていました。ある日、女主人から「話がある」と言われてサロンに出向くと「エジプトでは空気が乾燥しているので、毎日風呂に入ると体力を消耗して病気になる。ヒロシも風呂に入るのは週に 1 回とした方がよい」と諭されました。

彼らと同居を始めてしばらくして、環境変化のためか体調を崩したことがありました。こちらの思いが十分に伝わらない焦燥感から自分の部屋に閉じこもり、体力を回復させようと静養してしまいました。すると、入れ代わり立ち代わりに中断なく「ヒロシ、どうした？」、「何か要るものはあるか？」、「水かお茶を飲まないか？」、「何か食べないか？」等々に見舞いに来ました。エジプト人は相当なイジワルか理解力が足りない人種ではないかと思っていた時期でしたので、彼らの精一杯の好意を煩わしく感じ、不機嫌に應對したことを覚えています。今思い出すと、彼らには大変申し訳ない気持ちがしますが、一種のホームシックだったのでしょう。

彼らの言動に苛立ちを覚えながらある程度の月日が経ち、エジプト人と同居を続けるのは耐え難いと感じるようになりました。何とかこの閉塞感から抜け出さなければ、アラビア語を学んでも本当の意味での意思疎通はできないのではないかと思いました。そこで、まずは彼ら同士の話し振りや付き合い方に興味を持って観察し、日本人同士のそれらとどこがどう違うのかを知ろうとしてみました。

当時 40 歳台後半と記憶する下宿先の主人夫婦らからは、冠婚葬祭、家庭内やご近所のもめ事や出来事、家庭内の問題等についての対処振りを見聞し、エジプトの庶民生活の実態を知る絶好の機会でした。また、大人社会を覗き見し始めた思春期の娘や息子たちは、折に触れて歯に衣着せない言辞でコメントしたり、思いのままの言動を示したりし、時には両親から厳しくたしなめられる様子をも見聞しました。彼らの言動に興味を持って観察し始めると、不思議なことに今までの苛立ちや焦燥感が解消されたことを思い出します。

エジプトでの下宿生活は、私にとってはこの上なく貴重かつ有意義な経験でした。彼らと一緒に生活してその人柄に触れた経験がなければ、私は未だにエジプト人との意思疎通にすれ違いやある種の違和感を持ち続けることになっていたのではないかと思います。この経験は、その後在勤した他のアラブ諸国においても、現地の人たちと腹藏なく付き合うことが彼らとの円滑な意思疎通の早道であるという自信めいたものをもつようになりました。

その 2 年後には研修を終えてエジプトを離れたので、お世話になった下宿先の家族にはめったに会うことはなく、稀にしか連絡することもなくなりました。しかし、突然に飛び入りした日本人を家族の一員として扱ってくれた彼らには、言葉では尽くせないほどの感謝と恩義を感じています。お世話になった夫妻は既に亡くなっていますが、当時思春期であった娘や息子たちは、その後独立して家庭を持ってそれぞれの分野で活躍し、今や引退する年頃になっています。

先日、ちょっとしたお願い事があって、元下宿先の家族の一人で今や実業家として活躍している人物に 7~8 年ぶりに電話しました。最近のエジプト情勢もあり、先ずは彼らの様子を尋ねようとしたのですが、先方から「ヒロシ、どうしている?」、「家族は元気か?」、「いつ会える?」、「エジプトには来ないのか?」などと畳みかけられました。当時からの兄弟の様な絆を改めて感じ、嬉しく思いました。こうした経験から、異文化社会で育った人々と意思疎通を図ろうとする際には、先ずは相手の文化的な背景に好意的な関心を持つことが肝要であるとの思いを新たにしました。 (6月号に続く)

塩尻 宏 (しおじり・ひろし)、公益財団法人中東調査会参与、1941 年大阪府生まれ。大阪外国語大学アラビア語学科卒。1967 年外務省入省。新独立国家室長、在ドバイ総領事、駐リビア特命全権大使などを務め、2006 年退官。その後、2012 年まで財団法人中東調査会 常任理事。2012 年から副理事長・業務執行理事。2014 年から現職。